

## はじめに

2001年8月27日から9月2日まで一週間の予定で浙江省金華市を訪ねた。

エーバーハルトの協力者として『中国昔話タイプインデックス』や『浙東民間故事』(1941)に謝辞が掲げられていながら、その経歴についてはほとんど知られていない曹松葉について、関係者から話を聞く、また、金華地域で昔話の聞き取りをして、多少なりとも現在の伝承の状況に触れ、同時に、エーバーハルトの二冊から窺われる曹松葉収集の金華の昔話と比較して、相互に関連性や違いがみられるのか調べてみたい、以上二点が、今回の調査の目的だった。

日本からは、馬場英子、千野明日香、瀬田充子、中国側は上海文聯研究員の鄭土有が参加した。金華文聯の張根芳、黄子奇、曹宅鎮文化站の錢有宝の各氏には、話者の依頼をはじめ調査の設営、運営にたいへんご尽力いただき、おかげで一週間という短い時間ではあったが、目一杯活用して、順調に調査を進めることができた。特に黄子奇氏は、曹松葉が晩年生活を共にした末娘の曹桂環氏を見つけ出し、訪ねて話を聞くなどして、地元でも、その民俗学方面の業績については全く知られていなかった曹松葉の伝記的事実について、詳しく調べてくださった。今回、私たちも曹桂環氏の自宅を訪ね、直接話をうかがい、貴重な資料を見せていただくことができたのも、偏に黄子奇氏のご尽力による。

また金華市金東区宣伝部長胡則鳴氏および政府関係各位には、村での活動が問題なく進められるようさまざまなご配慮をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。

### 調査日程

8月28日から8月31日まで4日間、現在の行政区分では金華市金東区に属する曹宅鎮、すなわち曹松葉の出身地でもある鎮で、午前9時から昼食の休みを挟んで午後5時まで、民家（曹元善宅）に6名の老人に集まっていたいただき、張根芳、黄子奇両氏の現地語通訳で話を聞いた。この間、空き時間に、曹氏の祠堂、曹松葉が教員を勤めていた省立七中あと、太平天国の侍王府、今はその記念公園などを訪ねた。

9月1日は、最初に曹松葉の末娘の曹桂環氏宅近くの官田武帝祠を訪ね、その後、曹桂環氏宅を訪ねて曹氏の遺品を見せていただきながら話を聞いた。ちょうど中元節の期間に当たるので、午後は郭門村に墓参にも同行させていただき、その後、大仏寺を見学した。

2日は上海への移動日で、日曜でもあり、地元協力者の方には休んでいただくことになっていたが、午前中の空き時間に黄子奇氏が私たちが泊まっていた金華市内のホテルまで訪ねてくださったので、5日間の調査の疑問点、その他聞き漏らしたことなど確認した。

### 金華と曹宅鎮

金華は、杭州から温州に向かう途中にあり、浙江省の地図をひろげると、ちょうど真ん中に位置していることがわかる。

曹宅鎮は金華市の東18キロ、車で30分ほどの場所にある。蘭溪市と境を接す。杭州金華衢州を結ぶ杭金衢高速道が通る。人口43000、面積は92平方キロで、67の村から

成り、金華市金東区の中心的な鎮の一つである。穀物のほか、みかん、ぶどうの栽培、アヒル、鶏の養殖も盛んで、また花卉盆栽の栽培は全国的に知られている。工業は、セメント工場3、瑠璃瓦工場10、更に最近ではマホガニーの家具製作所も増えているという。建材関係の工場が多い。ほかには、全国に名高い金華ハムをはじめ、皮蛋、ビール、乳製品など食品工場も多い。金華酒として知られる寿生酒の醸造所も曹宅鎮にある。観光資源としては、540年、梁の大同6年創建の大仏寺がある。また金華の劇、婺劇がもっとも盛んな地域でもあり、現在も9つの坐唱班（楽器伴奏と歌唱だけで、演技は行わない）、二つの農村劇団があり、浙江省各地を巡回上演している、という。（金華県文聯、中共曹宅鎮委、曹宅鎮政府編『鍾靈毓秀曹宅鎮』2000年10月による）

金華は日本軍が侵攻した場所であり、曹氏の祠堂は、日本軍が駐留し損壊したと聞いた。

### 話者について

今回、話を聞いたのは次の六名である。曹宅鎮文化站の銭有宝氏が、村のこと昔のこと（曹松葉氏を知っている、というのも条件に入っていたらしい）をよく知っていて、きちんと話のできる人ということで、選んで頼んでくれた。約束の期間中、趙加根さんが、葬式の楽団として半日ぬけた以外、みなきちんと定刻に来て、最後まで付き合ってくださいました。二日目から加わった諸葛明成氏は、どうやら自分から名乗りをあげて加わったらしい。

曹志誠 1916生れ 小学4年卒  
邵榮泰 1920生れ 夜学で演劇を学ぶ  
趙加根 1933生れ 高卒  
邵榮盛 1935生れ 小学5年卒  
曹洪銀 1935生れ 曹宅農業中学卒  
諸葛明成 1932生れ 学歴なし、兵隊の経験

曹志誠 1916生れ 小学4年卒。その後、農業に従事。数年前まで杭州で商売をしていた。劇団では、銅鑼をたたく。

邵榮泰 1920生れ6歳のときから農作業を手伝う。徴兵を逃れて義烏、麗水に行く。13歳から劇団で鑼鼓を叩く。大花臉の役をやった。柴刈り、野菜売り、50年から81年までは劇団に所属していて、浦江、蘭溪、義烏を正月三日から一月一杯、長いときは二月一杯、上演して回った。

邵榮盛 1935生れ 農業が主な仕事。小さいとき、両親は農作業の暇なとき、夏の夕涼みや冬、雨の日、夜、横になってから話してくれた

曹洪銀 1935生れ 29歳から瓦焼き工だった。50歳で金華寿生酒店の守衛を5年間やった。このときに、たくさん話を聞いた。父から聞いた話も多い。夏の夕涼みのときに聞いた。今まで行った中で、一番遠いところは杭州と常山だろう。

趙加根 1933生れ 小さいときから農作業を手伝った。解放後、劇団に加わった。他の劇団を手伝った。劇団にいるとき、話を聞いた。蘭溪、新安、龍游、温州、蒼南、縉雲、永安などに行ったことがある。

諸葛明成 1932生れ 父は話が上手だった。小さいときから話を聞くのが好きだった。20歳で軍に入り、25歳で除隊した。軍にいたとき、杭州、上海、安徽、江西などに行った。

諸葛氏以外の五名は、みな劇団に加わっていたことがある。金華市内が主な活動場所であるが、場合によっては、更に遠くまで出かけることもある。しかし浙江省内を出ることはない、と言う。劇ができるということは、楽器ができる、脚本を読める、すなわち文字が読める、ということで、農民の平均よりは明らかに学歴が高い。このことは語られた話にも反映されていて、文字にまつわる話も多い。

諸葛氏は、話者としてあらかじめ選ばれていた人ではない。学歴がなく、兵隊に行っていた、というのは、他の五人より生活が苦しかったものと思われる。(私的ではあっても、ともかく政府公認で訪問している場合、紹介される老人は、たとえば家庭円満というようなことまでも含めて、やはりあらゆる意味で模範的とみなされる人になる)五人が基本的に浙江省内にとどまっているのに対し、兵隊として、安徽省、江西省などにも行ったことがあるという。話は特に笑い話を得意とするようだった。

六名とも、話を聞いたのは、農作業の暇なとき、夏の夕涼みなど、また寝物語に聞くこともあったという。いずれも父親も話が得意だったという。劇団の活動で、回っているときなどにも、互いに語りっこしたという。「説書」(語り物)で聞いた話もあるという。

尚、曹志誠氏は曹松葉の親戚でもあり、曹松葉の思い出、曹松葉が集めた謎についても紹介してくれた。今回は、4日間という限られた時間だったので、謎やわらべ歌については、あえて質問しなかった。また、女性の話者についても今回は時間の関係から追加していただくことはしなかった。ただ、場所を提供してくださった曹元善氏夫人とその友人、親戚の女性たちの様子では、語れるかどうかはともかく、みな、話はよく知っており、私たちと一緒に聞いて楽しんでいる場面もあった。次回は、ぜひ女性たちからも話を聞きたいと思う。

調査の方法として、我々がそれぞれ分かれて聞くことも考えたが、金華出身の鄭土有氏でも、出身地が市の南か北かでほとんど聞き取れないのを目の当たりにして、内容までしっかり理解して現地語通訳のできる人は、黄さん張さん以外には、望めないとわかり、全員で一緒に聞いた。

最初の日、曹志誠氏の息子の家を借りたが、29日は都合が悪いということで、曹元善氏宅を借りた。大仏寺の管理をしていたというが、2000年に亡くなり、現在は夫人が広い屋敷に独り暮す。玄関で靴を脱ぐようになっており、地下の物置、地上三階、そうじがよく行き届いた家だった。モダンな高級住宅で、完全に外部と遮断されるため、通りすがりの野次馬が加わる余地はなく、そういう「選ばれない」人たちとの会話から話が思いがけない方向に展開していくという面白さは味わえなかったが、雑音がなく静かで、聞き

たいことをゆっくり聞けたのはありがたかった。話をきれいに録音できたが、これも中国の調査ではなかなか得がたいことである。

2002年7月30日

曹元善家

昨年5名（曹志誠、曹洪銀 曹明棋 張加根 邵榮泰 兄は今年は欠席）

張根芳 黃子奇 鄭土有

### 1 皇帝の婿になったブーツ売り (Eb194) 曹志誠 10時5分

皇帝の姫が結婚する年頃になった。姫は、文章を作り、この文を読めた人に嫁ぐと言って、貼り出した。ところが誰もわかるものがなく、婿はいつまでも決らなかった。あるとき、ブーツ売りが通りかかり、張り紙の前で止まった。ちょうどその日の売上について考えていたのだが、まるで張り紙を読んでいるように見えた。王府の前で見張りをしていた兵士たちがたちまちこの若者を中に引きずり込んだ。ブーツ売りは若くて元気そうで皇帝の婿にぴったりだと思われたのだ。その晩、姫は夫のブーツ売りに、文章がわかったのかと聞いた。夫は一字もわからないと言った。明日、文武の役人がそろったところで、試験をされるのにどうするのか、と姫が言っても「どうしようもない」と言う。姫は宰相に質問されたら盤古王が天地を開いた話をしなさい、と教えた。夫が「覚えられない」と言うと、太鼓を見て思い出すようにと、太鼓を作って渡した。ところが太鼓は扁平だったので、皇帝の前で間違えて「扁鼓王の話をする」と言った。宰相が盤古王のことしか聞いたことがないと言うと、扁鼓王は盤古王の父だ、と言ったので、皆感心した。翌日の試験は宰相が天を指すと、夫は地を指し「地面は濡れる」と答えた。（宰相は天を示したのだが、夫は雨が降ると解釈して、地面が濡れる、と応じた。雨が降ったから濡れている、ブーツが必要）、次に宰相が一本指で「一」字を示すと、夫は二を出した。宰相がひとつだけブーツを買う、と言っているのだと思い、ブーツは片方だけでは売らない、「二つ」と答えた。宰相は天のことを考えたが、夫はブーツのことを考えて答えた。

(E194靴屋が皇帝の婿になる)

民間月刊1期9集 姫が字を読める人を探すところから扁鼓の部分までは同じ

### 2 金金宝と魔法の鉢 曹洪銀 11時9分まで

義烏の県城稠城に金老大と王菊花と言う夫婦がいた。二〇石、一石は二畝半だから五十畝の土地があり、何不自由のない暮らしだったが、ただ子どもがいなかった。城隍廟に子授けを祈願してみたら、と勧められ、豚の頭や鷺鳥など立派なお供えを用意してお参りした。夢でお告げを知らせてくれるように祈って、廟に泊まった。土地が多いから、困っている人に分けろ、という夢のお告げだった。五石の土地を売って、代金を銀に換えて、その銀を貧乏人に施した。しかし妊娠の兆しがないので、またお参りした。もっと土地を施せと言うお告げなのでまた五石売り、銀を施した。まもなく妻は妊娠して、男の子を産んだ。金宝と名づけた。ところが金宝を生んでから、王菊花は病気がちになり、金宝が4歳のとき、とうとう死んでしまった。王菊花の薬代や葬式の費用でまた土地を五石売った。今度は金老大が病気になる、金金宝が7歳のとき死んだ。金老大は五石の土地は決して売

るなど遺言したが、金宝は母が死んだときにも五石使ったのだから、と売ってしまった。村人は金宝を哀れんで面倒を見たが、金宝が十八歳になると、皆はいつまでも人の飯を頼っているのを嫌い自分で働くようにと言った。金宝は悲観して自殺しようと思ったが、その前に、将来に見込みがあるのかどうか城隍廟にお告げを聞きに言った。貧しくて何もないので手ぶらで行った。金金宝も夢をみたが、夢で授けられたのは、籃とお碗と箸と一つまみの灰だった。金宝は、これは乞食になれ、という意味で将来に見込みはないのだと考え、川に飛び込んで自殺しようとした。川に飛び込んだが、漁師の網にかかって、舟に助けあげられた。なんと漁師は父の金老の友だちだった。夢のお告げに絶望して自殺しようとしたのだと話す、漁師は福建省に灰城県菜籃府と言うところがあり、そこの椀子村に椀子殿、筷子橋がある。そこの人は太っ腹で米をたくさん恵んでくれる、と言った。金宝が袋を用意して出かけると、一軒で四、五斤ほども恵んでくれるので、なるほど米はすぐ袋いっぱいになった。食べていく心配がなくなったので、筷子橋の下に水浴びに行くと、その水は澄んでいて、つるつるしたものを拾ったら、はちだった。寝泊りしていた椀子殿に持って帰り、もらった米を少しそのはちに入れた。ご飯を炊こうとはちの蓋をあけたら、米がいっぱいが増えていた。このはちは聚宝盆だったのだ。銅銭で試し、次には銀を入れ、次には金を入れた。椀子殿には置場がないので、外の墓に隠すことにした。最初は銀でいっぱいにしたが、やはり金のほうがいと、墓の二つの穴を両方とも金で一杯にした。椀子殿の祭りが来ると、金金宝は祭りに奉納する劇の費用もほかに必要な金もすべて出す、と村の人に言った。乞食が金を出すと言うので、村の人は信じようとしなかったが証文を書くとうまく信じた。村には大売と小売というヤクザがいた。乞食が金を持っていると聞いて刀で脅しに来た。金宝は村人に恐れられている二人のことを聞き知っていて、脅しに来ると、ご馳走でもてなし、金が要るといって、それぞれに二百銀ずつやった。二人はこの金で賭博をして八百銀ももうけた。もらった金を返そうとしたが、金宝はどうしても受け取らないので、やくざは礼に員外の娘を妻に世話することにした。員外は自分の娘を乞食にやれと言われても、やくざの二人の話なので断るわけにもいかず、娘に聞いてくれと言った。娘も困って、一二〇丈の紅絹と結納のつづら（天籃）を六十、重さ四両の金の腕輪、一斤の金の首飾りなどを六日以内に用意するという条件を出した。金宝は義鳥に帰って準備すると言って、墓から金を取り出し結納の品を調べた。結婚後は員外の家で暮した。もうお金は十分あったので、聚宝盆を皇帝に献じて県知事に封ぜられた。（1時25分）

### 3 石の獅子 (Eb47-1, 48)      午後1時半から      趙加根

母が小さいとき話してくれた。この辺では誰でも知っている話だ。

あるところに祠堂があり、入口に二匹の石の獅子があった。この獅子は口をきけた。小さい兄妹は学校に行くとき、鍋巴（ご飯のおこげ）をかじりながら歩き、石の獅子のところに来ると、鍋巴をその口に押し込んでいた。あるとき、獅子が口をきき、「いまに天と地が一つになり、油の雨が降る。この油の雨は、降った後、燃えて大火事になる。そのときは獅子の口からもぐりこんで腹の中に隠れなさい。私の口に血がついた日とその日だ」と言った。ある日、豚殺しの人が豚を殺したとき、うっかりその血が獅子の口についた。兄と妹はそれを見ると慌てて隠れた。二人が隠れたとたんに二つの石の獅子は池の中にくる

がっていった。すぐに油の雨が降り出しやがて大火事になった。池の水はたっぷりあり、上では火が燃えたが、下の水は熱くならず、以前獅子の口に押し込んだ鍋巴を食べて飢えをしのいだ。この災難が収まったとき、地上の人々は死に絶え、二人だけが残った。子孫を残さなければならないが、兄妹なので結婚できない。二人は相談して、石の磨を山の上まで運んで行って、落として重なったら結婚できる、一緒にならなかつたら結婚できないということにした。石磨は重なったので、二人は結婚して、百人の子が生まれた。(張根芳訳) EB 47-1, 48 曹 6, 133 頁 (東陽)

#### 4 術を使う牛飼い 趙加根 1時42分

三本脚の猫というあだ名の和尚がいた。三本脚の猫とは、たいしたことはないが、少しは武術の心得のある者のことをいうが、この和尚は自分の武術はたいしたものだと思っていた。牛飼いの子どもがいて、何も特技はないが、ただ、いつも牛飼いの合間に、一本の指を地面に突きさす練習をしていて、この指の術はなかなかたいしたものだった。

あるとき、和尚が人と武術の競争をしたら、この牛飼いが見ていて笑った。和尚は怒って、おまえに何ができるのか、自分と勝負できるかと言った。牛飼いは一本の枝を折ると、門の石の獅子のところに行き、指を突き刺して孔を開け、そこに木の枝を挿し、服を脱いでそこにかけた。和尚は、かなわないと退散した。(張根芳訳)

#### 5 対句をつける 曹志誠 1時50分

あずまやでたくさんの人が休んでいた。すると一人の人が「皆で対句をつくって遊ぼう」と言った。皆賛成して、最初に塾の先生が「筆頭尖尖白紙蓋 写字画画人人愛 如果我不讀書 教員在哪里来 (尖った筆先で 字を書き絵を描けば皆が喜ぶ 勉強しなければ 教師ではない)」と言った。

二番目は軍官で「子彈尖尖木壳蓋 打死敵人人人愛 不到前方去拼命 官長哪里来 (尖った銃弾で 敵を撃ち殺せば皆喜ぶ 前線に行つて戦わなければ 軍人ではない)」

三番目は和尚で「荷蓮尖尖木魚蓋 吃素修行人人愛 每年我不苦苦修練 如来哪里来 (尖った蓮で木魚を叩く 精進修行に励めば皆喜ぶ 苦しい修行を積まなければ 仏ではない)」

最後に婦人が言った「皮靴尖尖衣褲蓋 脱下衣服人人愛 不要認為難看相 大家從這里爬出来 (ズボンの先から尖った靴先が見える 服を脱いだら皆喜ぶ みっともないと思ふなけれ 人はここから這い出した)」(黄子奇訳)

#### 6 蠓螂山 (Eb83) 曹明棋 2時6分

昔一人の読書人が都に科挙を受けに行った。途中、蠓螂山を通つた。山はとても高く山頂に三つの大きな石があり、「蠓螂山上三塊石 為何不接天 (蠓螂山上の三つの岩 なぜに天につながらぬ)」と題してあった。読書人はこの二句を見たが、どう対句をつけたらよいかわからず、慙愧に絶えず、とうとうこの岩にからだをぶつけて死んでしまった。死んで鳥に生れ変わってもこの句をさえぎり続けた。後に別の読書人がここを通りかかった。この人は鳥の鳴き声を聞くや、すぐに「雲霧罩住就不接 (雲と霧に覆われて天につながらぬ)」と続けた。これを聞くと、鳥はたちまち岩にからだをぶつけて死んでしまった。読書人は

都に科挙を受けに行った。(黄子奇訳)

Eb 8 3鳥の由来 1

## 7 山東痢痢 邵榮盛 2時11分

昔、モンゴル族の知事が金華に来た。知事は言葉がよくわからなかったので、金華の言葉を解す者を従者（通訳）に雇った。この従者は目端しが利いた。あるとき、知事は果物が食べたくなり、従者に杭州雪梨を買いに行かせた。ところが杭州雪梨が見つからなかった。従者は代わりに羅卜（大根）売りから羅卜を買った。知事が、どうやって食べるのかと聞くと、皮を剥き、砂糖をかけて食べさせた。北の人は辛い物好きで、大根もよく生で食べる。知事は気に入って、これは何というものか、と聞くと、従者はこれは山東辣梨ですと答えた。鬍鬚（辣梨）は金華では禿げの意味になる。

あるとき、この従者が母親の病気で、休みを取って家に帰っている間に、知事はまたこの山東辣梨が食べたくなり、使用人に買いに行かせた。実は大根なのに、山東辣梨と言われたので、わからない。使用人は禿げを見つけると、どこの人か聞いた。皆、金華だ、永康だ、と言うので要らない、と言い、ようやく西洋景（覗きからくり）を歌っている禿げが「山東だ」と答えたので、有無を言わず役所に連れてきた。山東辣梨を買ってきました、と言うと、知事はすぐに皮をむいて、砂糖をかけろと言った。頭の皮を剥こうとしたら、西洋景うたいの山東の禿げは大声で「助けて」とわめきだした。知事が飛び出してきて見て、「これじゃない」と言った。ところが使用人は、他のはみんな山東鬍鬚ではありません、と答えた。(2時半)(黄子奇訳)

## 8 文字当て 王漢清 (1943生れ 大専 大工 永康の人、婿入りして曹宅に)

明の奸臣嚴嵩が権勢をほしいままにしていた時 王楷は大監議を勤めたが、任を辞めて故郷に帰ってきた。王楷には三人の娘がいて、上は商人、まん中は役人、末娘は農民と結婚していた。三人の婿は岳父の誕生祝いに、岳父の気を紛らわそうと、酒の席で字謎をすることになった。王楷は一つの物で岳母も使う物、という条件を出した。一番目の婿の役人が「上」の字を言った。「上字象盞灯 当官照前不願後（上の字は灯のよう、役人は前に気を使い、後ろはかまわない）」商人は非の字で「非字象篋櫛 司法（櫛法）不清（非の字は梳き櫛のよう 司法が清廉ではない、そんな役人は辞めるべきだ）」農民は一の字で「一字象鳥 該硬時不硬（一の字はマラのよう 硬くあるべきときに硬くない）」と言った。(黄子奇訳)

嚴嵩（1481-1568）弘治18年（1505）の進士。世宗のとき、太子太師となる。子の嚴世蕃とともに寵をたのんで専権を極めた。書画の収集でも名高い。

## 9 嚴嵩 趙加根

明代の嚴嵩は江西の人。若いとき科挙の試験を受けに行くとき、金華の隣、龍游の孔家莊を通った。体の具合が悪くなったのか、天候のせい、孔家莊の近くの塔に泊まった。孔家莊の孔太公はその晩、夢に塔に龍がいるのを見た。翌日、家人を塔に見に行かせると、中に青白い顔の書生がいて病気のように言った。孔太公はすぐに彼を家に引き取っ

て養生させた。試験を受けに出かけるときには、旅費を与えた。巖嵩は若いとき、賢く、才能もあり、詩にも優れていた。後、巖嵩は宰相になった。孔太公の恩を忘れず、何度も手紙を書いて招いた。孔太公は妻を行かせた。孔太公は妻が帰って来てから、どのように待遇されたか聞いた。妻は、毎日豚を一頭殺し一番いいところだけを供された、と言った。これを聞くと、孔太公は巖嵩の生活が余りにも贅沢で、浪費がはなはだしく問題があるとして、巖嵩を警戒するようになった。巖嵩から来た手紙は全部焼き、自分の手紙には墨ににがり混ぜた。こうしておく数日で紙が腐り、証拠が残らないからだ。巖嵩はもともと悪人だったわけではないのに、墮落したのには、次のような話が伝えられる。あるとき、女中が巖嵩に朝鮮人参のスープを持って行ったが、部屋の入口ですべて、すっかりこぼしてしまった。賢い女中は、とっさに、ベッドの上に青龍を見てびっくりした、と作り話を言った。巖嵩はあわてて女中を口止めしたが、このとき以来自分を龍の化身とみるようになったのだ。(黄子奇訳)

## 10 王靈官 邵栄盛 3時15分

道教の天將王靈官は、はじめ商人だった。笠を作っていた。丁稚は美男子だった。王靈官は作った笠を、市に持って行って売った。商売に出かけると、妻と丁稚は仲良くしていた。王靈官は毎朝、鳥が鳴くとすぐ出かけた。家の裏に竹林があり、たくさん鳥がいた。丁稚は縄を竹に結び、引っ張って鳥を驚かせて早く鳴かせて、王靈官を早く出かせさせた。ある日、王靈官は忘れ物をしてとりに戻り、戸を開けると妻と丁稚がベッドで一緒に寝ていた。以来、王靈官は笠作りをやめ、家も商売も丁稚に譲って、山に入って道教の修行に努めた。山のある道教の寺で修行した。何年も修行した後、師匠にいつ仙人になれるか聞いた。師匠は仙人になれるかどうかは、まだ試してみなければいけない。明日ある場所に行って木に登り眺めているようにと言った。池で女が洗濯していた。しばらくすると、男が来て、川を渡ったが、包を忘れていった。気がついて取りに戻ったときには、包は誰かに持っていかれてしまっていた。男は洗濯している女に包を見なかったか、と聞いた。女は知らない、と言った。すると男は跪いて、拾ったのならどうか返してくれと、何度も何度も言った。女はもともと知らないのに、そんなにされたら死ぬしかない、と言って、川に飛び込んで死んだ。女が川に飛び込むのを見て、男も飛び込んで死んだ。王靈官はこの一部始終を見て、帰った。師匠に何を見たか、と聞かれて話すと、仙人になれる、と言われた。なぜ仙人になれるのか、王靈官は人が死ぬのを見ても助けなかった。王靈官には、現世のことだけでなく前世のことも見えていた。前世で男と女は夫婦で、旅館をやっていた。男の包を持っていった男は、前世でこの夫婦に殺されたので、夫婦は報いを受けたのだ。王靈官が救わなかったのは、だから正しいことをしたのだ。(黄子奇訳)

## 11 元宝 (Eb148)

三人の人が、山で開墾していた。どんどん掘っていたら、一人が元宝を見つけた。三人は大喜びで、どう分けるか相談した。平等に分けることにした。すると掘り当てた人が、自分が見つけたのだから、少し多くしてくれ、と言い、他の二人も承知した。それから山神にお礼をすることにして、見つけた人が蠟燭、線香、紙銭に酒と料理を買いに行った。この人は、道々、自分が掘り当てたのだから、自分に権利があるのに、二人は自分に多く

分けるのにもいやな顔をしていた。お供えを買うついでに毒薬を買って、混ぜて食べさせ、二人を殺してしまえば、全部独り占めできる、と考えた。残りの二人は、もともと三人で開墾していたのだから、あいつがを見つけなければ、我々が見つけたかもしれない。それなのに、一人だけ余計に取ろうとするなんておかしい。お供えを買って帰ってきたところを襲って殺してしまおう、と相談した。そこで、お供えを買って山頂に戻ってきたところを殴りかかって殺してしまった。これで二人で山分けだ、と喜んで酒と料理でお祝いをしたため、たちまち毒にあたって死んでしまった。「呂純陽が五十両贈り、三つの命が失われる」と言うのはこのことを言っている。呂洞賓はもともと親切に元宝を贈ったのに、かえって三つの命が失われることになった、と言う。(黄子奇訳)

Eb 1 4 8

## 12 娘に取りついた幽霊

3時46分曹明棋

幽霊の伝説でこれは本当にあった話だ。(曹宅の南側の)豊浦瑣圓村で起きたことだ。瑣圓村と言うのは、もともと菜園で鍵がかかっていた。「爬梯自摘菜」という掛け言葉があるが、この瑣圓というのはいつも閉ざされていた。事件は、この瑣圓村で起きた。解放直前、16、7歳の娘が軍官の幽霊と仲良くなった。娘には軍官が拳銃を持って部隊を引き連れて通っていくのが見えた。娘はこの軍官と二人でよく一緒にいた。やがておばあさんも現れるようになったが、実はこのおばあさんも幽霊で、娘にどこの人か生れはいつかと聞いて、つまり結婚の取り持ちをしようとした。解放前後のことで、村には民兵がいた。民兵が幽霊を捕まえて娘を救おうとした。娘を取り囲んで守っていると、幽霊が入ってこようとして、娘を守っている民兵に殴りかかった。

## 13 海瑞の寺参り (Eb129)

趙加根 4時

明の名高い清官海瑞は、最初淳安県知事をした。山に廟があり、海瑞は任官するとすぐに、廟にお参りに行った。お参りで一番重要なことは誠心誠意ということで、これは一日の一番早くに線香をあげるということだ。そこで海瑞も早朝出かけて行った。ところが三本の線香がすでに燃えていた。海瑞は、廟に行って廟の人が自分で線香を燃やしたのではないかと確かめたが違うと言う。海瑞は、こんなに早く参ったのになぜ最初になれないのだろうかと聞くと、和尚はまだ精進が足りないのではないかと、言った。海瑞は、今度こそ一番でお参りしようと、二度目にはもっと早起きして服も着替えて参ったが、やはりすでに三本の線香が供えられていた。海瑞はまた和尚のところに行って、「こんなに早く、沐浴し、服も着替えてお参りしているのになぜ精進が足りないのか」と訊いた。和尚は「かぶっている帽子や靴は何でできているのか」「牛皮だ」と答えると、「だから精進が足りないのだ」と言うので「廟の太鼓も牛皮じゃないか」と言ったとたん、太鼓は突然ガラガラと落ち、太鼓の皮は天に上っていった。三回目はもっと誠心誠意、早起きし、服を換え布靴を履き精進して行った。ようやく最初に線香をあげることができた。

さてこの廟を管轄しているのは王霊官だった。王霊官は海瑞の清官ぶりに感心したが、それでもまだ少し信用していなかったのも、小鬼を派遣して海瑞を見張らせた。小鬼は銅の錘を持ち、もし海瑞が清廉でない行いをすればすぐにそれで打つことになっていた。しかし海瑞には一向に怪しい行いはなく、小鬼は錘を使うときがなかった。ある暑い日、海

瑞は部下の海鵬を連れて農村に調査に出かけた。喉が渴いた海鵬が西瓜畑の西瓜を一つ取ろうとすると、海瑞はそれを誡め、もしとるなら重さを確かめて市場の値段の金を置け、と言った。小鬼は海瑞が西瓜を取るのを見て、さっそく打とうとしたが、西瓜の代金を置くのを見て、海瑞の清官は本物だと感心して、王霊官に報告し、見張るのは辞めた。

Eb 1 2 9

#### 14 ほら吹き兄弟

曹志誠 4時 1 9分

兄弟がいた。兄は伯髡（ほら吹き、大ぼら吹きを春秋時代の呉の伯髡に倣って伯髡と呼ぶ）、弟は乱湊（いいかげん）、どんなことも適当に丸め込む。ある時、兄の伯髡がある店の前にいると、周りにいた人が気づいて何か言わせようと、「飲みに行くのか」と言った。すると伯髡は「今朝魚釣りに行ったが、魚は釣れず、アヒルの卵を釣り上げた。ちょうど朝飯のおかずがなかったので、おかずにした」と言った。ちょうどそこに弟の乱湊が来たので、皆は「兄さんは卵を釣ったと言っているがそんなことはないだろう」と訊いた。すると乱湊は「本当だよ。襪を釣り上げたら、中に卵が入っていたんだ」と言った。

またある時、伯髡は「今朝、川に水を汲みに行ったら、36斤の斧を拾った」と言った。皆が信じず、弟の乱湊に「そんな重い斧を拾ったなんてうそだろう」と言うと、「本当だよ。昨日の晩大水が出て、山が流れてきたが、ちょうどその山の木を伐ったところで、この斧は伐られた木と一緒に流れてきた」

またある時、伯髡が池で水浴びした後、岸で乾し牛肉を食べていると、皆が「その乾し牛肉はどこで手に入れたのか」と訊いた。伯髡は、「さっき水浴びしていた時に、もぐったら、ちょうど海龍王の台所で、そこからもらってきた」と言った。そこへ弟の乱湊もやって来て水浴びしようと池に飛び込んだ。ところが木の切り株に頭をぶつけ、血を流しながら岸に上がってきた。皆が「どうした」と訊くと、「もぐって海龍王の台所に行ったらコックに見つかりハンマーでなぐりかかられたのだ」と言った。（方言での味わいは標準語に訳すと消えてしまう 黄子奇訳）

#### 15 倪九官 1

曹志誠 4時 3 6分

金華白龍橋に倪九官という人がいた。倪九官はある時背中におできができた。床屋の主人のところに薬があると聞き、乞食のかっこうをして薬をもらいに行った。床屋の主人は、少し欲張りだったので、薬をくれるときに「おできが倪九官にできたなら、よかったのに。しばらく左団扇で暮せたら」と言った。もらった薬を飲むとおできはすぐによくなり、倪九官は、礼をしようと思ったが、床屋の言葉が気に入らなかった。困らせてやろうとして、まず最初に焚き付け用の木切れを十担ぎ分届けた。これで床屋の小さな店はほぼ一杯になった。続いて米を十担ぎ送ると、店には置場がなくなった。そこに酒と肉を贈り、最後に銅銭を贈った。

金華市故事卷「医背痛」（廿一相の話）

#### 16 倪九官 2

邵榮盛 4時 4 0分

倪九官の娘が結婚することになった。嫁入り前には相手の家から結納の品が届けられるが、その時には、運んできた人を嫁の家でご馳走することになっている。そこで婿の家か

ら贈り物を運んできた人は、いつ食事が出されるか、と待っていた。はるばる蘭溪から金華まで来ておなかはぺこぺこだったのに、倪九官は一向に食事を出す気配がなかった。運んできた人が台所を覗くと、ちょうど小豆の餡が煮あがったところだった。皆は、おなかすいてたまらないので、この餡を食べてしまった。ほとんど食べ終わったところに倪九官が入って来て、「料理が間に合わなくて、今ようやくできたところです、召し上がってください。この餡は豚の餌用に煮たものだったのに」と言った。それからご馳走が出されたが皆は餡を食べてしまった後で、もう食べられなかった。

さて倪九官の娘は嫁に行った。嫁入り道具も何不足ないなかなか立派なものだったが、娘は足りないものが二つある、と言った。火鉗と火叉だった。竈で火をおこすときに焚き付けを竈の中に押し込むものである。特に火叉は刺のある枝を押し込むのに使う。倪九官はわかった、と言うと、三日にあげずこの二品を送り届けた。嫁ぎ先でうんざりしても贈りつづけた。

倪九官の娘に子が生れた。娘が孫の誕生日を知らせてきたので、倪九官は十個の卵を贈った。すると娘が、孫の誕生日の贈り物としてはあまりに貧相だから、もう少し格好のつくものをたとえば牛などを贈ってほしいと言った。卵は金でできているから十分だと思ったが、娘の言葉に腹を立てた倪九官は、牛を一頭贈ることにした。人を見ると突っかかってくる闘牛用の牛を一頭買って贈った。誕生日に長生鶏を贈る習慣があるが、もらったほうでは、この長生鶏はすぐに殺してはいけない。ましてや長生牛となったらなおさらで、嫁ぎ先では困った。

娘の嫁ぎ先は役人だった。ある時、倪九官が訪ねて行くと、宮殿に遊びに行こうと誘われた。宮殿には紫金鐘という大きな鐘があった。親戚に鐘を叩いてみたら、とそそのかされて倪九官が叩いたら、皇帝を筆頭に文武百官が皆集まってきた。皇帝は倪九官を召して、なぜ鐘を叩いたのかと聞いた。倪九官は仕方なく、十万担ぎ分の穀物を献上しようと思っている、と言った。皇帝は許したが、娘の嫁ぎ先では強盗と結託して、途中の水路で襲って、届けられないようにした。何度も送りなおしているうちに、さしもの金持だった倪九官もどんどん落ちぶれてとうとう素寒貧になってしまった。(黄子奇) 5時8分

## 8月31日

### 1「養生地」の伝説(1)

ある家にとっても年をとったおばあさんがいた。年をとっているが、とても元気だった。夜は孫と一緒に寝ていた。真夜中になると、おばあさんはいつも出かけて行ったが、帰ってくると必ずベッドで何か食べる音がする。コリコリとはっきり聞こえる。孫も食べてみたくなって「おばあちゃんは毎晩なにか食べてるね。ぼくにも食べさせてよ」と言う、「いいよ」と言ってすぐに何か渡してくれた。孫は見て肝をつぶした。なんと手の指だった。孫は食べられず、傍らに置いておいた。翌朝、母さんに言った。「お母さん、変だよ。おばあちゃんは毎晩必ず出かけて、帰ってきたら何か食べてるんだけど、指を食べてるんだよ」そして指を母さんに見せた。母さんはこれを見て、「たいへんだわ」と言ってすぐに家族で相談した。対応が決るとすぐにおばあさんのところに行って、「お母さん、寝室のベッドの位置が悪いから変えないと」と言った。みんなでおばあさんのベッドの場所を変えた。すると、一晩でおばあさんは亡くなった。なぜかと言うと、おばあさんが寝ていた部屋は「養

生地」にあったのだ。「養生地」と言うのは、ずっとそこで寝ていると永遠に死なないのだ。  
(黄さん：この話からも老人があまりにも長生きするのはよくないことがわかる。私たちのところでは、老人があまりにも長寿だと息子や孫が病気がちになる、息子が先に死んでしまうなどという。)(曹志誠)

## 2 「養生地」の伝説(2)

これはこの村でおきた本当の話だ。村に鄭紅亮という人がいた。その息子が死んで葬られたところが、「養生地」だった。どうして「養生地」に葬られたとわかったかというところのことだ。村の子どもたちが「養生地」に放牧に行くと、たとえば三人で行ったのが四人になっている。一人増えるのだ。子どもたち自身にはわからないが、人を見ると四人になっている。大人たちはこのことに気づいた後、これはよくないというので調べてみたら、墓には草が生えていない、まるきり草が生えていない。そこで墓を掘り起こしてみると、墓の中に一人の子どもがいた。裸だったが、皮膚の色艶はまるで生きている人と同じで、全く腐乱している様子はなかった。しかも、墓を掘り起こした後で、その子はおしっこまでしたが、まもなく見えなくなった。消えた。これも一般に言われることだが、日光に当たったので消えたのだ。(曹志誠)

## 3 上季村と下季村(Eb112)

ここから十数華里のところの上季村と下季村というところがある。(私の親戚がいる)この方言では上朱村、下朱村になるが、この「朱」は「鬼」と同じ発音である。この地名には次のような伝説がある。

昔、この村に一人の若者がいて、毎晩、畑の見張りに行ったが、見張り小屋には、毎晩決まってきた美しい娘がやって来て泊まっていった。すると若者はしだいに痩せてきた。母さんは息子が日一日と痩せていくのを見て心配して「いったいどうしたわけなんだい」と尋ねた。若者は最初は黙っていたが、何度も聞かれてとうとう答えた。「実は、毎晩、美しい娘が来て泊まっていくのです」母は聞いてすぐにどういうことになっているか納得して、対策を考えると息子に言った。「このおこげを持って行って、とにかくこれをその娘に食べさせなさい。今晚、娘がやってきたら、娘を喜ばせて、笑ったら、口に押し込むんだよ。嫌がったらわきの下をくすぐって、笑った拍子に口に押し込んで吞込ませるんだよ」と言った。夜、娘がやってきて二人で楽しんだ後で、若者はお焦げを娘の口に押し込んだ。娘は最初、食べようとしなかったが、くすぐられると笑い出して吞込んだ。(黄子奇：鬼神の類はこの世で調理したものを食べると人になる。)おこげを食べたら娘はもう帰ろうとはせず、若者は夜が明けると娘を日にあたらないように被って背負い、連れ帰った。この世の人となつたばかりのものは天の光や熱に当たってはいけけないので、被ったのだ。二人は夫婦となり、二人の息子が生れた。母さんは嫁に、外に出てはいけけない、もし出るときにはタオルか何かで必ず頭を覆わなければいけけない、と言った。二人目の息子が生れてまもないある日、突然雷雨になった。外に出していた子どもの服を取り込もうとして、あわてて頭に何もかぶらずに表に出て外の光に当たったとたん、女は雷に打たれて死んだ。今、ここに二つの村があるが、上の息子の住んだ村が上季村で、下の息子が住んだ村が下季村だという。(曹志誠)

#### 4 虎の嫁 (Eb37)

(この話は、最初と最後が違っているだけで、真中の部分は前の上季村と下季村の話と同じである。この話では女の幽霊ではなく虎の精が美しい女になって訪ねて来る) 虎の精は山のふもとの田の畔で虎の皮を脱いで美しい娘になる。このありさまを見た母親は虎の皮をこっそり持ち帰り、水がめの下に隠す。あとは、娘におこげを食べさせ、夫婦になる。一男一女を得るが、次第に母と嫁の仲が悪くなり、口げんかが絶えなくなった。とうとう母が「虎の妖怪」と罵ると、嫁は「私が虎の妖怪ですって」「そうだよ、虎の妖怪さ」「証拠を見せてください」と言うことになり、「証拠はこれさ」と水がめの下から虎の皮をとり出すと、嫁は虎の皮をかぶるなり虎となって、母を食って山に逃げて行った。(夫についての言及はない) (諸葛明成)

#### 5 花嫁の愚かな母の話 (Eb 笑話 6 愚か婿 1-5)

娘の嫁入りに母親がついていく。婚礼の宴でお祝いの酒を飲むときには礼儀正しくしなければいけない。がつつ食べたりあわてて食べるのは禁物だ。娘は母が愚かなことをよく知っていたので、「お酒を飲みご馳走をいただくときには、お行儀よくしてね」と言ったが心配で、母の服に糸をつけ、一回引いたら一口というように、糸の合図で飲んだり食べたりするようにと言った。ところが宴会の途中でメンドリがまぎれこんでその脚に糸が絡まった。メンドリがもがいてばたばた動くと、そのたびに母は箸を動かす。メンドリがますます暴れだし、とうとう間に合わなくなった母はすべての料理を皿ごとすべて自分の前にあけた。(諸葛明成)

#### 6 愚か婿話 丈人と長人 (Eb 笑話 6 愚か婿 1-6)

丈人(舅)の誕生日に娘が夫に鶏を一羽届けさせた。夫は丈人と言う言葉を知らず、発音の等しい「長人(背の高い人)」のことだと思い、鶏を持って出かけた。歩いていくと、ちょうど市の開かれる日で市を通ると、なるほど背の高い人がいた。夫が鶏を送ろうとすると、その人は、「知り合いでもないのに、どうして鶏をくれるんだ」と言って受け取ろうとしない。それでも夫がどうしても受け取ってくれ、と言うので、背の高い人は仕方なく受け取った。夫は、用事を済ませたと、ご機嫌で帰ってきた。家に帰ると、妻はなぜこんなに早く帰ってきたのか、聞いた。夫が、「市に行ったらちょうど背の高い人がいたんだよ」と言うと、妻が「うちの父に届けて、と言ったのよ」と言った。「おまえの父さんはちっとも背が高くないじゃないか。その人はとても背が高かったんだよ」と言うと、「違うの。私は父さんに届けてと頼んだのに、見も知らない人にあげてしまって、すぐに取り返してきて」夫は仕方なく急いでまた市に出かけた。さっきの人をあちこち探し回ったが、見つからない。ふと見ると、せむしの人がアヒルを一羽ぶら下げている。夫はすぐにそのせむしに飛び掛って言った「俺の鶏をどこにやったんだ。さっきはあんなに胸を張って背も高かったのに、何でそんなに背中を丸めているのか。俺が気がつかないと思っているのか。わかっているんだぞ。鶏を返せ」せむしがなんのことかわからないでいるうちに、夫は「鶏の嘴もペしゃんこにして、これで気がつかないと思ってるのか」と言ってアヒルを奪った。愚か婿は力が強かったので、せむしはアヒルを奪われるままにするよりしかたなかった。(曹洪銀)

## 7 おろか婿話 「天福麒麟」(Eb 笑話 6 愚か婿 1-1)

またあるとき、妻は愚か婿に実家の父の誕生祝いに酒と絵を届けさせた。一甕の酒というのはつまり二甕四十斤の黄酒（紹興酒）で、ほかに客間正面にかける絵を贈るのが習いだった。届に行く前に、妻は夫が恥をかかないように、絵をひろげて見せて「ここに書かれているのは、「天福麒麟」（黄子奇：麒麟は瑞獣で龍と対である。龍は水を噴き、麒麟は火を噴く。麒麟と牛は同類といわれるので、牛がお産をするときは、屋内で産ませない。火事になるのを怖れて外で産ませる）と読んで聞かせ、後について読むように言った。夫は「天福麒麟」と読んだが、ご飯が口に入っているにもかかわらずごもごはつきりしないので、妻はいらだって「なってない」と言うと、夫も「なってない」と言い、妻が「夜、一緒に寝ないよ」と言うと、「夜、一緒に寝ないよ」と言って、これも覚えた。舅の家に酒と絵を届けると、姑は喜んだ。絵が広げられると、ばか婿はさっそく「天福麒麟」と堂々と読みあげた。婿は学があり、こんな難しい漢字まで読めるのかと姑がますます喜んでほめると、「なってない」と言う。姑が「そんなことはない」と言うと、「夜、一緒に寝ないよ」と言った。（曹洪銀）

## 8 田螺息子 (Eb42)

あるところに子のない老夫婦がいた。いつまでも子どもができないので、五聖に子授けを祈った。（劬榮盛：願掛けに行った五聖廟というのは、以前はこの辺りの農村にはどこにでもあった。土地神の宮と似たようなもので、山のほうなら今も見られる。石を三つ並べて立て、その上に石を置いて屋根にしかだけの小さな宮だ。宋の將軍を祀ったもので、宋の建国に功績をあげ、皇帝が即位できたら宮を立てる約束だった。一矢の高さに一矢の幅で、これはもちろん矢を射た高さの幅のことだったが、宮を造るときになったら、軍師が宮殿より立派になると言ったので、ただ一本の矢の長さ分の高さの幅の小さなものになった。）五聖は海龍王のところにいた田螺が修行を積み、この世に生れたがっていたので、この田螺を生れさせることにした。老夫婦は田螺が生れて最初はがっかりしたが、子どもがいなかったので、ことさら大切に世話をした。田螺息子は可愛く育ち、特に口が達者だった。ある日、田螺息子が「父さん母さん、今日はおじさんが来ますよ」と言うと、果たしておじがやって来た。おじは「商売に行くから、金を貸してくれ」と言った。田螺が「おじさん、私も連れて行ってください」というので、連れて行くことにした。実はおじは何の商売をしたらいいのか、この時まで全然考えていなかったのだが、田螺が「米がいいですよ。一船分の米を仕入れていけば必ず儲かります」と言うので、米を仕入れた。その間に田螺は生まれ故郷の海に行き、海龍王の所に行くと二匹の赤い鯉をもらって来た。船に米を積み込んで出発すると、日照りで米が一粒も取れなかった土地に着いた。人々は争って米を買い、瞬く間に売り切れた。しかも高値で売れて、おじは大もうけした。田螺は赤い鯉を連れて帰ってくると、自分の部屋の戸も窓も締め切って中に閉じこもった。家族には中の様子は何も見えなかったが、にぎやかな歌や踊りの声に、男女が楽しく笑いさざめく様子が聞こえてきた。母が障子の穴から覗くと赤い鯉は二人の美しい娘になって田螺と楽しく遊んでいる。母が思わず喜んで声を立てたとたん消えてしまった。おじが、また商売に行くと言いに来ると、田螺はまた連れて行ってと頼んだ。おじが何が儲かるか尋ねると、「材木です」と答えた。

おじは材木を仕入れた。田螺はまた海龍王のもとに行き、一對の猫をもらって来た。とても奇妙な大きな痩せた猫で、毛は鉄の針のようだった。さて材木を積み込んだ船が着いたのは、大火事でたくさん村が焼き払われた場所だった。船が着くと、家を建てようとする人が押しかけ、材木はたちまち売り切れ、おじはまたまた大もうけした。さて田螺も年頃になった。親は、子がなければ子を思い、子が大きくなれば、結婚を考えるもので、嫁を迎えたいと思ったが、田螺では来てがない。困った夫婦は、また五聖に頼みに行った。五聖は今度も助けてくれた。五聖は金持の劉家の娘が年頃で、まだ嫁に行っていないので、劉家の娘の夢に現れて、田螺の嫁になれと告げた。娘が「どうやって田螺の嫁になるのですか」と尋ねると、「田螺は人の仮の姿だ。おこげと小さな斧を授ける」と言ってどのようにすればよいかを教えた。娘の夢の翌日、田螺の両親が結婚を申し込みに来た。娘の両親は、田螺と人の娘が夫婦になれるか、と言ってどうしても承知しなかったが、田螺の両親が、娘さんに聞いてください、と言うので娘に聞いた。すると娘は夢のお告げでわかっているから、承知した。結婚した夜、田螺が美しい若者の姿になると、娘はお焦げを食べさせた。お焦げを食べたら、田螺はそのままの姿でとどまった。だがかかとははまだ田螺の殻がついていたので、娘は斧で叩き落した。田螺が殻を大事にしまって置くように言ったので娘はつづらにしまって鍵をかけた。まもなく国に大事が起きた。異民族が侵略してきた。皇帝が派遣した者は皆敗れて、逃げ帰ってきた。皇帝は、誰でも敵に戦勝した者は王にする、その妻は一品夫人に封じるとお触れを出した。田螺は、勝てると考えて、お触れをはがし、皇帝に会いに行った。皇帝は將軍たちが皆敗走した後なので、喜んで、さっそく田螺を前線に派遣した。田螺がどうやって戦ったかと言うと、先に話した海龍王にもらった二匹の猫だ。猫は人を見れば人、馬を見れば馬、武器を見れば武器を食い、向かうところ敵なしで、たちまち敵を倒した。勝利して帰ると皇帝はさっそく田螺と将士を謁見し、田螺を并肩王に封じ、妻は一品夫人に封じた。田螺は名利を共に得て幸せな暮しができたが、以前の海の田螺の生活が懐かしくなった。妻に「大切にしておけと言った田螺の殻を出してみせてくれないか」と言い、殻を見ると、たちまち中にもぐりこんで消えてしまった。(趙加根)

### 9 黄升斗の伝説 (Eb62)

曹宅に程近いところに黄升斗がある。その家にはちょうど一家が一日食べるのに十分なだけの穀物が出てくる石窟があった。食べきると、翌日にはまた出てきている。ところがある日、欲張りなおじがやって来て、「穴の口を少し大きくしたらもっと米が出るだろう。けちけちしないで、自分にも少し分けてくれたっていいじゃないか」と言うので、大きくしたら、米はもう穴に一杯たまらなくなった。この米は実は二匹の白ねずみが蘭溪の米屋から運んできていたのだが、口が大きくなって、夜だけでは一杯にならなくなったので、昼間も運ぶようになり、人に見つかって殺されてしまったのだ。以来、もう米は出なくなった。(山のふもとに今も小さな石窟がある。昔、米の出た穴だと言う。今は家も無い)

この村は小さいけれど靈気があり、さまざまな現象が新しい皇帝が出現することを示していた。黄升斗から米が出たその家では、白犬と黒犬の二匹の犬を飼っていて、毎日、食事の残りをやっていた。二匹は満腹すると屋上で昼寝したが、二匹は黒雲と白雲になってしっかりとこの場所を覆っていた。機が熟さないうちに古い皇帝に見つかるにつかまるの

で、皇帝の気がもれないように隠していた。ところが黄升斗の鼠が殺され、米が出なくなると、この家では食事も事欠くようになり、犬もえさが無いので、えさをあさりに出かけて、屋上で寝る暇もなくなって、気はもれてしまった。

またこの家では二羽のアヒルを飼っていた。アヒルも人の食事の残りをえさにして、えさを十分食べると家の前の池で泳ぎ、水をバシャバシャさせて、鏡のように澄んだ水も濁って何も見えなくなっていた。ところが、二匹の白鼠が死んで、犬も屋上で昼寝しなくなり、アヒルもえさが無いので逃げてしまうと、この場所を隠すものはなくなってしまった。老皇帝は望遠鏡を眺めて、新皇帝誕生の気配を察して軍を派遣した。新帝は逃げ惑い、とうとう最後に黄塘の水底に隠れた。皇帝の軍は探し回っても見つけれなかったが、おしゃべり九官鳥が「水底だ、水底だ」としゃべったので地雷で殺された。(黄子奇)

### 10 はげの皇帝 (Eb195)

禿げがいた。禿げ(痢痢頭)をこのへんでは「痢頭」と言う。禿げの妻は美人だった。禿げは美しい妻と一緒にいて以来、野良にも行かず、一日妻を見つめていた。「毎日家にもっているんじゃ、畑も荒れてしまう。仕事に行かない」と妻が言っても「きれいなおまえを見ていると働きに出たくなくなる、それに置いて行くのは心配だ」と言う。妻は「心配だなんて、私の絵を描きますから、畑に持って行って見たくになったら出してみればいいでしょう」と言って、絵姿を描いて渡した。絵を畑の端に挿しておいた、と言うのと、胸の前にかけたという言い方があるが、とにかく禿げはちょっと働いては妻を眺めていた。ところがある日、大風で絵が飛ばされ、どんどん飛んで、とうとう宮殿に落ちた。宮殿守護の兵士たちは絵を拾って眺めると、女が美しいので、皇帝に献上した。皇帝は、宮中のあまたの美女にもこれほど美しい女はいない、ぜひ妻にしたいと考え、すぐに兵士を探しに行かせた。皇帝がついに禿げの妻を探し出し、宮中に連れてきて婚礼の式を挙げようとする、禿げの妻は「その前にひと目夫に会わせてください」と言った。皇帝が承知して禿げがやってくると、妻はこっそり何か言った。数日後、禿げはまた皇帝が許可した、と言って自分で刺繍した龍袍(皇帝の服)、葦で編んだ服、あるいは蓑を着て来る。皇帝が禿げの服を奇妙に思っていると、このとき、もう皇帝の後になっている禿げの妻が「龍袍を脱いで、ちょっと着てみてくださいな」と言う、あるいは、宮殿に来て以来、一度も笑わない妻を笑わせようとして、皇帝が龍袍を脱いで禿げの服を着ると、妻は喜んで笑う。が、妻はすぐに禿げに龍袍を着るように言い、龍袍を着こんだ禿げは皇帝になり、禿げの服を着た皇帝は庶民になった。禿げは皇帝を殺させ、禿げが皇帝になり、人々は痢頭皇と呼んだ。(諸葛明成)(曹志誠:「身穿百鳥毛、快快斬掉去」(百鳥衣を着て早く皇帝を殺せ)という言葉があり、禿げの服は百鳥衣という言い方もある。また禿げは包丁研ぎになりすまして、「身穿百鳥毛、磨鏡磨剪刀」と唱えて宮中に潜りこんだ、という言い方もある。)

### 11 自殺に失敗した弟

曹宅鎮に三人兄弟がいた。末の弟は目が悪かった。小さいときは母が可愛がってくれたが、母が死ぬと兄たちは負担が増えるので、農作業もできない弟を嫌った。弟は暮しがたたず、自殺しようとして、最初は雷公藤(毒草で、若芽を七つ食べれば死ぬという、根を乾して挽いたものを撒くと虫除けの農薬になり、以前は菜虫薬と言った)を探して食べたが、目

が見えないので、違う草を食べて失敗した。次は川に飛び込んだが浅くて溺れず、三回目は首吊りしようとして梁に縄をかけ、竈の上に登ったが、綱が切れた。自殺失敗を知った兄や親戚が芸事を習うように勧め、道情を覚えさせた。(黄子奇：道情は全国で行われる民間歌曲で、金華一帯では特に盛んである。まるい小鼓と竹のカスタネットで拍子を取る。魚鼓ともいう。道情は唐代に始まるといわれ、道士の説唱から変化したという。しばしば役所の重大事件や社会の出来事をテーマにするので、ニュース性があり、「唱新聞」とも言う)(邵榮泰)

## 12 犬が畑を耕す (Eb29, 30)

二人兄弟がいた。両親が死んで分家することになると、兄は結婚していたので、兄と嫂、弟で三分の一ずつに分けようと言う。つまり兄が三分の二、弟が三分の一として、最後に牛が残った。牛は分けられない。兄はまたずるいことを考えて、「俺が口、おまえが尾を引け。牛がついていったほうが、牛の持ち主だ」と言った。当然、牛も兄のものになった。(黄子奇：鼻を牽けば、牛は必ずついてくる、という言い方がある) 弟には牛の毛一本残らず、ただ虱一匹手に入れただけだった。弟はその虱を可愛がって飼っていたが、隣の鶏が来てばかりと食べてしまった。その隣の人は親切で、「うちの鶏があんたの虱を食ったから、この鶏を替わりにやろう」と言った。弟は鶏を手に入れたが、数日後、今度は隣の犬に食われてしまった。この人もやさしくて「うちの犬があんたの鶏を食ったから、代わりにこの犬をやろう」と言った。弟は犬と一緒に暮した。作物を作るには、まず畑を耕さなければならないが、弟には牛がない。兄は貸してくれないので、犬に教えることにした。弟には考えがあった。おいしそうなおいのお焦げを畑の反対側に置くと、犬はずんずんずんとお焦げに向かって鋤を引いて走っていき、また反対側にお焦げを置くとそのにおいに向かってまたずんずん耕していく。こうやって犬と畑を耕していると、傍を商人の一行が通りかかった。商人たちはふしぎに思って立ち止まり、何をしているのか尋ねた。畑を耕している、と答えると、「犬が耕すなんて聞いたこともない。本当に耕したら、荷物を全部あげよう」と言った。弟がいつものようにすると、犬は耕し始めた。商人はすっかり感心して商売の荷を全部くれた。弟がすっかり金持になったのを見て、嫂は羨ましくなり、「あんたの弟は金持になったわ。あんたも何とかしなさいよ」と兄に言った。兄は牛がいるのに弟に犬を借りた。犬にたっぷりえさを与えてから畑を耕させようとしたが、犬は腹いっぱい動こうともしない。そこに商人たちが通りかかり、何をしようとしているのか、と尋ねた。「この犬は畑を耕す」と兄が言うと、商人は「犬が耕したら荷を全部あげよう。だがだめだったら荷の半分の値段を払え」と言った。犬は耕さず、兄は畑が耕せなかったばかりか、商人に賠償しなければならず、かっとしたあまり、犬を殺してしまった。兄の家はそれから貧しくなった。犬が死んだ後、弟は悲しんで、鄭重に犬を葬った。犬の墓から一本の竹が生え、弟が墓参りに行って、その竹を支えて泣くと、竹が揺れてたくさんの「元宝(馬蹄銀)」が降って来た。揺銭樹だったのだ。嫂は知ってまた羨ましく妬ましくてたまらないので、兄を行かせた。兄は墓参りしたが、唐辛子を目のふちにつけてうそ泣きしながら竹を揺すった。降って来たのは犬の糞だったので怒って竹を切り倒した。弟は竹が切られているのを見ると、竹をかわいそうに思って担いで帰り、魚をとる籠に編んだ。これで魚をとると、毎日たくさん魚が取れた。食べきれない分は、乾物にした。嫂はまた羨ましく妬ま

しくなって、兄に魚かごを借りに行かせた。兄が仕掛けたら、入ったのは蛇ばかりだった。兄は怒って踏み潰した。弟はまだ何かに使えると思い、土を入れて葱を植えた。葱はよく育ち、食べるといい香りの屁が出て、この屁をかぐと病人が元気になった。屁の評判が広がって、病人がたくさんやってくるようになったので、弟は天井に穴をあけ、階上で屁をすると、階下にいる病人が屁をかけるようにした。元気になった人は、皆弟に御礼を包んできたので、弟はまたたくさん収入を得た。嫂がまた兄にまねをさせた。兄は、葱を食べるといい香りの屁が出ると聞いて、弟に葱をもらった。兄は弟の葱を全部食べたので、腹が痛くなり、屁の代わりに下痢をたれた。下でいい香りの屁を待っていた人は、かんかんになって兄を殴り、半殺しにした。(邵栄盛)

### 13 ほら吹き李と欲張り張 (Eb191)

金持の欲張り張が家を新築した。ほら吹き李はその家を見て、「たいしたことないな。おれの家には及ばない。おれは金はあるが見せびらかさない。うちの柱は千本で(部屋数が多い)、月門(壁を丸くくりぬいた門)から出入りし、金糸のカーテン、2艘の小船で塩を運び、72人が柴を刈り、64人が米を搗く」と言ったので、欲張り張は羨ましくなり、さっそく関係をつけようと娘を嫁にやることにした。娘はやむなくほら吹き李についていった。行けば行くほどあやしくなる。ほら吹き李の家は山奥にあった。千本の柱というのは、麦藁や葦を編んで壁代わりにしているので、月門というのは、米を干すのに使う丸い箆が扉の替わりに下げてあり、蜘蛛の巣だらけの窓が金糸のカーテンというわけだった。2艘の小船というのは二羽のアヒルで、その卵を売って塩を買うのが唯一の収入、72人とは72歳の老人、つまり李大哄の父が柴刈りをして、64人は64歳の母が米搗きをする、全くの貧乏暮らしだった。娘が嫁いでまもなく欲張り張はほら吹き李の家を訪ねた。途中で聞いても誰も知らない。こんな金持をどうして誰も知らないのかとふしぎに思って訪ねて行くと、全くの貧乏人の家だ。「よくも、騙したな」とどなると、連れて来ていた手下どもにほら吹き李を捕まえさせ、袋詰にして連れて行った。途中、食事時になったので食堂に寄り、ほら吹き李を入れた袋は木にぶら下げた。ほら吹き李が逃げ出す方法を考えていると、木にぶら下げられていたので、よく見えたのだが、せむしの老人が三十頭の羊を連れてやってくるのが見えた。ほら吹き李はさっそく大声で老人を呼んだ「おじいさん早く助けてくれ。おれはせむしを治せるから、助けてくれたら、せむしを治してあげるよ」。老人は「せむしを治してくれるなら、助けるよ」と言ってすぐに袋をおろして、ほら吹き李を出してやった。助けられた李はさっそく老人のせむしの治療にあたり、老人を田の取水口のところにうつぶせにさせると、上から大きな石でドンと押さえつけた。背はまっすぐになったが息も絶えてしまった。ほら吹き李は老人を袋に詰めて替わりに木にぶら下げ、羊を連れ帰った。食事を終えて袋のところに戻った欲張り張は、中はほら吹き李だと思い、いつまでも袋を持運ぶのも面倒なので、片付けてしまおうと川に投げ込んだ。欲張り張がほら吹き李を片付けたと思って、娘を引き取りに行くと、村の入口のところで羊を放牧している李に出くわした。確かに川に投げ込んだのに、どうしてここで羊を放牧しているのか、とびっくりしていると、またほら吹き李が騙しにかかった「運がよかった。川に投げ込まれてから、海龍王に会いに行ったら、ちょうど羊を分配しているところで、おれにも三十頭あまり分けてくれた。今日は羊だったが、某日には牛を分けると言っていた。案内し

ましよう」張は欲張りなので、牛を分けると聞いてぜひ、と頼んだ。その日が来て、二人は出かけた。海龍王のところには水路を行かねばならない。李は木の桶に乗り、張は甕に乗せた。「龍王に聞こえるように道中、桶と甕を叩き続けたいといけない、私の叩くとおりに軽ければ軽く、重いときは重く叩くように」と言った。李が桶を叩けば張は甕を叩き、だんだん激しくなって、ついに甕は叩き割られ、どっと水が流れ込んで欲張り張は溺れ死んだ。桶に乗ったほら吹き李はなにごともなく無事に戻ってきた。(邵栄盛)

## 14 竈神

竈神は観音菩薩の父の妙善王だが、修行が足りず、食いしん坊なので、姜太公が「竈王」に封じた。(邵栄盛)

## 9月2日 黄子奇さんに聞く

(今回の調査では、もっぱら昔話をうかがってきた。最後に、これらの話が伝えられてきた農村の暮しについて、少し話していただいた。)

田を耕す前には、まず田公田母を祭る。「田起しの成功は半年分の収穫」という言葉があるように田起しは重要だ。盛大に祀るならブタの頭、ガチョウを調理して桶に入れて田のふちで祭る。線香と黄表紙(紙銭)を供える。酒は使わない。私のところではお供えに蝋燭はなかった。同様に、春節(旧正月)の後で最初に水を汲むときには、桶と一緒に、線香と黄表紙を持って行って塘公塘母を祭った。井戸を使うところなら井戸を祀るが、私のところは塘(池)から水を汲んでいた。

二月、最初に田を耕すときには、レンゲが一面に咲いている。稲の後にそばや大麦を植えるところもあり、また雑草が生えるに任すところもある。以前は藁は農家の貴重な燃料で、家に担いで帰って、階上や、家の前後、あるいは田の隅や山の木の根元に積み上げておいて竈のたきつけにした。今は小麦も含めて使い道がないので、焼く。田にそのまま放置することもあるが、こうすると翌年までに腐りきらず残って非常に耕しにくくなるので、焼くことが多い。

虫の害に対しては金華では六月六日と「保稻節」(六月一日)がある。「保稻節」の日は若者が隊を組んで赤松郷山口村に行く。山口村は邢植の故郷である。邢植は大柄で、たいへん猛々しく力があつた。しかし生涯志を得ることなく、死に際して次のように言った。「男一代生前志を得ず、死後に大事をなさん」と。このような願をかけ、死後、神となった。言い伝えによれば、邢植は母がないという。金華には子どもをからかうときに、「母なし子、樟の木の洞から生れてきたよ」と言う。

### 1 子育て幽霊 (Eb115)

小さな店があつた。夕方になると、毎日食べ物を買に来る人がいた。何日も続くので、店の人はふしぎに思い、その人にこっそり糸をつけた。糸をたどっていくと、ある墓についた。墓からは樟の木が生えていた。墓を開けてみると、棺おけの横に子どもがいた。⇒ E115 死んだ母と子

これが邪植だという。母の死後に生れた子どもなので、皆ふしぎなことと考えた。後に樟の又に小さな廟を作って、邪植を祭った。この辺では邪公と呼ぶ。山口村の東紫岩に「保稲節」の日に行き、邪公大帝と印を押したお札をもらってくる。このお札を竹の棒の先に挟んで田に立てておくと稲が無事に育つと言う。あるいは札をもらってきた後、村や田んぼをぐるりと回ってから田に立てる。この紙片を保稲符と言い、ほかに「胤」のような字も書いてある。稲を守る別のやり方に、ぼろ箒、女のぼろの靴下、スカート、下着を田の端にかけておく、というのもある。

邪植は本地神、植物神である。金華には樟を母とする風習がある。曹宅村は北宋にはすでにあったというが、この村と樹齢を同じくするという古い樟が曹宅中学のそばの経堂橋にある。去年、赤い布がかけてあるのを見た。どこかの子どもがこの樟と義理の母子となったことがわかる。15年程前に浦江に行ったとき、県城の北の樟に、ちょうど端午の節句の後だったが、赤い布と粽がかけてあるのを見た。赤い布は義理の親子となった印、粽は母への節句の挨拶だ。樟は長寿で生命力の強い木だから、樟を義理の母にするのはたいてい体の弱い子などだ。

端午節は、既に話したように黄巢と関係がある。屈原の話は本で読んだだけでここにはない。この月餅にはみな中の蜜がこぼれないように小さい紙が貼ってあるが、民間では反乱の日時が書いてあったと言う。これも元の時、農民蜂起の日時を知らせるのに使ったという。これは元宵節の伝説と混ざっている。元宵は元消に通じ、打倒元の暗号で、餡の中に印が入っていたという。

七月七日には家の前の空き地で星やホタルを見る。「做明堂」と呼ぶ。七日の晩に雨が降ると、七姉妹が競争しているという。七姉妹は天で髪を洗い、その水を流す。七仙女の末っ子が牛飼に服を持ち去られて妻になる。

十月の早稲の収穫後、最初のご飯を嘗新米飯といい、最初一杯を茶碗にこんもり盛り付け、線香を数本挿してテーブルに置き天を祭る。

## 2 稲の起源 (Eb86)

稲はどこから来たか。飢饉の時代、人々は食べるものがなかった。玉皇大帝のもとに布袋羅漢がいて、布袋の中には種がある。人を派遣して穀物の種を盗ませようとしたが、何度も失敗した。そこで犬に行かせた（ネズミという言い方もある）。犬は布袋羅漢が居眠りをしているすきに袋を噛み破いて穀物を毛の中に隠した。体中に穀物をまぶしつけた。穀物の種を盗んだ後で、天の兵が気づき、布袋も目覚め、すぐに犬を追いかけた。追われ追われて、犬は池に飛び込んだ。全身水に浸かったが、しっぽだけ立てていたので、身体につけた穀物は池に落ちてしまったが、しっぽについた穀物は落ちず、この世に持ち帰り、この世に穀物が存在するようになった。⇒E86

（この人は犬に対して親しみを持っているように見えます）中国人は忠孝節義というが、牛は忠、羊は孝、乳を飲むときに膝まづくから、犬は義、馬は節、主人が乗る馬は、部下を乗せないからと言う。近くの山に犬を記念して作った「狗義亭」というのがあった。

稲を刈るときに少し残す。父が鼠や雀に分けてやるため、といて私に残させた。残しておく、いつのまにかなくなった。鼠に対しては一般に嫌っている。鼠の嫁入りについては聞いたことがないし、新年の頃を鼠の嫁入りと言って静かにする習慣もない。

### 3 オンドリと龍 (Eb1)

昔、鶏には角があったが、龍に貸したという話はもっともよく知られた話だ。小さいとき祖母が話してくれた。「龍哥哥、把角還給我（龍兄さん、角を返して）」と鶏の声そっくりに言う。鶏は毎日鳴くが、龍は天にいる。⇒E1

### 4 牛と蚕 (Eb80)

二番目によく聞いた話は牛と蚕の話だ。牛は蚕に連れられてこの世に降りてきた。牛は蚕に背負われてきて、蚕の頭を踏んだので、蚕の頭に牛の足跡がついている。蚕が牛を騙してこの世に連れてきたので牛が怒って仕返しした、ともいう。又蚕は桑を食べるが、牛も桑が好きなので、牛は怒って蚕と競って桑を食べる。蚕が騙したから、蚕の食べ物の桑を食い尽くしてしまう、という意味だ。⇒E80

「虎が漏りをこわがる」の話も多い。(日本には虎がないのでしばしば狼になっています)以前、金華には狼がとても多かった。十軒ほどしかなかった私の村で三人が狼に食われた。いずれも60年代の飢餓の時期のことで、当時は、皆十分に食べられなかった。58年に中国では鉄鋼を土法で作ろうとして小さな高炉を作り山の木を切り尽くして野ウサギなどもいなくなり、食物連鎖が壊れて、狼は人を食うしかなくなったのだ。村には果樹がたくさんあったが、皆切られてしまった。みんな大きな木で、クヌギの木など数人でも周りを囲めないほどの太さだったが、切ってしまった。私の村は新安村、もともと横壟塘と言ったが、63年に羊尖山ダムを作って横壟塘が沈んでしまってから新安村と改めた。父は農民だったが、二年間私塾に通ったことがあり、村で唯一字が読めた。それで解放後は頼まれて成人識字学校で教えた。人に慕われていて、知識もあったので、後に村長になった。父は民間故事もわりによく知っていて金華の風俗にも詳しくかった。それで雨乞いにも反対したが、村人に責められて龍台で膝まつくことになった。

村は中農までで地主はいなかった。私の家は貧農だった。母の話によれば、4歳から牛飼をしたという。最初はおばあさんと一緒に一頭の子牛を放牧に連れて行った。牛は小さいほうが安いので、買って育てる。ある程度成長すると耕作に使う。耕作させるようになると、毎日放牧に行かなければならない。父は北山から草を取ってきたが、その草を食べるとよく肥えた。私は小学校卒業まで放牧し、中学からは学校に泊まりこんだので、弟妹に代わった。牛飼はたいへんな中にも楽しみがあり友達と一緒にいき、中に大将になる子がいて誰か一人に番をさせ、他の子は遊んだ。牛がけんかを始めたり、交尾してしまうこともある。妊娠すると、耕作に使えなくなるので、こういう事態にしないよう父母から注意されていた。牛は空腹だとせっせと食べるが、満腹してくると遊んでなかなか食べない。牛が満腹すると、最後に水を飲ませる。たっぷり飲んだら帰る。あまり早いと、牛虻がいるので、日暮れ近く3時過ぎか4時頃まで待つ。牛飼だけなら楽しいが、普通は夜食用の草も採ってこないといけない。「人は不当な財がなければ金持にはならず、馬は夜食の草がなければ肥えない」というように、夜、牛にも少し草をやらないといけないので、時には草刈もしなければいけない。以前は畑のあぜには全然草は残っていなかったもので、生えているところを見つけるとすぐに刈った。「転んだら土をつかむ（転んでもただでは起きな

い) 」というのは、今は女性を形容するのに使う言葉になっているが。一緒に遊ぶとき、糞缸棋などをよくした。なたを投げる遊びもよくした。地面に平らに落ちるのが最低で、土に刺さるのが少しまし、立ったら好くて、最高は柄で立つこと。勝った人には刈った草をやるとか、野草を摘んでいるときは、野草をあげる。

このあたりでは男尊女卑の考え方はまだ根強く、「スカートを穿いた者とは考えが違う」と言って、女が出て行っても男を出せ、といわれる。男の言うことでないと意見として認めないことも多い。